

広報NASUKARASUYAMA

那須烏山

— No.95 —

2013
August
8

Public Relations Magazine
of Nasukarasuyama City

山あげ祭	2
学校再編答申を報告	6
那珂川沿川自治会で水防訓練	8
全国大会出場者を激励	12
まちの話題	14
インフォメーション	16
花いっぱい運動	18

市イメージキャラクター



やまどん ここなす姫 からすまる



かなうらり
金棒曳きに連れられて(7月27日(土)、JR烏山線開業90周年記念屋台パレード)



鍛冶町若衆と祭関係者が全員集合し記念撮影。

国の重要無形民俗文化財に指定されている「山あげ祭」が
7月26日(金)から28日(日)までの3日間、烏山地区の市街地
で開かれ、約7万5千人の観光客でにぎわいました。今年の
当番町は鍛冶町。若衆(大野義明筆頭世話人)を中心に、市をあげ
て熱い、暑い真夏の祭典が繰り広げられました。

山あげ祭は、今から450年ほど
前の永禄3年(1560年)、烏山地方
に疫病が広まつたため、時の烏山城
主那須資胤が疫病消除を祈願して牛
頭天王を烏山町(旧酒主村)の中心部
に勧請したのが始まりとされます。
当時は、相撲や神楽獅子を奉納して
いましたが、後に、踊りの奉納や所作
狂言の上演が始まり、年月を経て今
の形になつたといわれます。

今年は、中日の途中から大雨に見
舞われましたが、そのほかは天候に
も恵まれ、踊り子たちが、主芸題の
「戻り橋」や「将門」を始め、日本一の
野外歌舞伎舞踊17公演を披露しまし
た。

宵祭が行われた25日(木)。予報では
雨が心配されましたが、天気の崩れ
もなく午後5時から鍛冶町会所前で
「笠揃」が無事に開かれました。関係
者あいさつに続いて、金棒曳きの子
どもたちを先頭に役員や若衆たちが
屋台を引いて鍛冶町内を一周。お囃子
が始まると、待つてましたとばかり
に地元の人々などが集まり、沿道
で若衆に手を振り、激励しました。
その後、木頭の合図で山があげら
れ、美しくライトアップされるなか
「三番叟」と「戻り橋」を公演。迫力あ
る歌舞伎舞踊と様々な仕組みの舞台
装置に観衆から大きな歓声が沸き起
こりました。

翌26日(金)は、いよいよ本祭初日で
す。朝から雲が重く垂れ込め、蒸し暑
い中、午前6時、八雲神社から鍛冶町
若衆が、威勢よくみこしを担ぎ出し
ました。これは、八雲神社から御仮殿
までみこしを「出御」する行事で、早
朝にもかかわらず、儀式をひと目見
ようと、多くの観衆が集まりました。
午前9時からは、いよいよ最初の
山あげ奉納行事「天王建」が御仮殿前
で行われ、「戻り橋」を公演。その後、
鍛冶町若衆たちは、金棒曳きを先頭
に屋台を巡回させ、金井町、元田町、
日野町の順に訪問した他、地元の鍛
冶町に戻り、公演しました。

また、午後8時からは、嵐山睦会
(大金康男会長)が、重さ1トンを超
える万灯御輿を元田町から山あげ会館
に運び、夜の祭を盛り上げまし
た。

中日となる27日(土)も曇り空。午前
6時には、再来年の当番元田町若衆
によつて御仮殿のみこしが担ぎ出さ
れ、各町を巡回する「渡御」の行事が
行われました。赤面の天狗と青面の
からす天狗が露払いしながら練り歩
き、お昼にはみこしが再び御仮殿に
納められました。

午前8時30分、泉町で訪問余興が
行われる頃には、太陽が顔を出し、若
衆をはじめ踊り子、常磐津など、関係



①鍛冶町による出御の準備②元田町による渡御のみこし③日野町による還御のみこし④踊り子記念撮影⑤夜の「三番叟」公演⑥「将門」で大ガマに乗る滝夜叉姫⑦嵐山睦万灯御輿⑧今年の主芸題「戻り橋」⑨雨の中のブンヌキ⑩常磐津の皆さん⑪にぎわう露店街。

者は汗だくになりながら舞台に取り組んでいました。しかし、その後の雷雨により、正午から予定していた公演は、山をあげず舞台だけで踊りを披露。山がない舞台も珍しいと、多くの観衆でにぎわいました。

この日は、JR烏山線の特別編成列車も運行し、市外からの観客も特に多く、午後2時に披露された山あげ会館前広場の特別公演は、観衆であふれかえる程でした。

午後4時には、JR烏山駅前に5町の屋台が勢ぞろいしてJR烏山線開業90周年記念式典が開催され、駅前から御仮殿までパレードしました。この頃から、厚い雲の中から再び雷鳴が響き渡り、まるで「戻り橋」のような激しい雨が降り出しました。そんな中、御仮殿前で3町の屋台が繰り出してブンヌキが始まり、各町の若衆は、自町の囃子方に雷雨に負けじと景気づけ。観衆も、ずぶ濡れになりましたが、激しいお囃子と若衆の熱気を楽しんでいました。

雨は、その後の舞台にも影響し、夜の2公演は鍛冶町会所で踊りだけの披露となりました。

そして最終日の28日(月)は、前日の雨が嘘のように朝から日差しが強く、暑い最終日となりました。

鍛冶町での3公演の他、正午から

は前日に続き、山あげ会館前で特別公演「蛇姫様」「戻り橋」を披露しました。また、午後3時からは、関係者が一同に会し、山を背景にした記念撮影が行われ、カメラを持った人々が押し寄せました。

午後5時には、「還御」が始まり、来年の当番町となる日野町若衆が御仮殿からみこしを担ぎ出し、烏山市街地を練り歩きました。同時に、旧烏山町内の子どもみこし等が繰り出し、沿道から声援が送られました。

午後6時には、八雲神社前に4町の屋台が集まり、お囃子の競い合いブンヌキが繰り広げられました。交差点を中心に向き合い、その中に入った若衆たちは自町の屋台を鼓舞して囃子方を応援。鳴り響くお囃子と歓声、若衆たちの躍動する動きと熱気に観衆は圧倒されました。

そして午後10時、山あげ祭の終わりを告げる「笠抜」が鍛冶町会所前で開かれました。「戻り橋」そして「闇の扉」に続き、踊りを指導する西川扇士浪さんの「老松」の舞台で全公演を終了しました。

笠抜では、大谷範雄市長の「千秋楽御口上」に続き、木頭の齊藤篤志さんが、「これだけ大きな祭を無事に終ることが出来たのも、関係者一人ひとりの絆が強かつたから。本当にありがとうございました」と歓喜のあまり涙を流しながらあいさつ。舞台で

祭を支える“鍛冶町若衆” 6年間の集大成がいま

準備を着々と進めてきた若衆が、6年間の集大成を祭本番でいかんなく発揮しました。

舞台の裏では、山をあげたり、舞台と館の間の「橋」を人力で支えたりと、華やかな舞台の裏方として一糸乱れぬ団体行動を見せていました。まさに、祭の影の主役です。また、「地車」に舞台装置を乗せ、次の公演場所に運ぶ迫力ある姿に観衆は圧倒されました。



鍛冶町

木頭の合図で大山をあげる。



①八雲神社前でブンヌキ②夜の「将門」③山あげ会館前で特別公演④「戻り橋」の迫力ある鬼の演技。



は、祭りを支えた若衆等が次々と胸
上げされ、一大行事を無事にやり遂
げた充実感や安堵感から清々しい笑
顔を見せていました。
そして、午前0時30分、日野町若衆
による還御が、多くの観衆に見守ら
れながら八雲神社にお宮入りし、今
年当番の鍛冶町から来年の当番日野
町に引き継がれました。境内からは
盛大な拍手がいつまでも鳴り響いて
いました。

4月から広報担当になり、初めて山あげ祭を取材しました。広報の腕章を付けている私は、県内外から来た観光客に何度も声をかけられました。その内容は、「栃木県にこんなに見事なお祭があったとは知らなかった。若衆や踊り子、常磐津の活躍は素晴らしい。もっとPRすべき」というものでした。地元のお祭がここまで評価されていることに感動し、今まで何も知らなかった自分が恥ずかしくなりました。そして、市の魅力をできるだけ多くの人に知ってもらうのと同時に、地元の人にも楽しみ方を伝える努力が必要だと感じました。

JR烏山線開業90周年記念式典

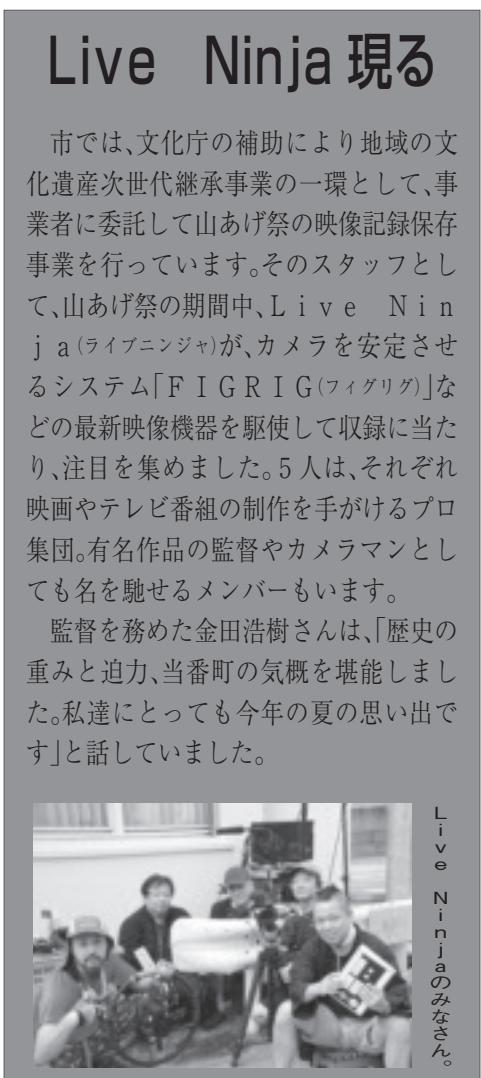
駅前に約2500人

東日本旅客鉄道(株)では、7月27日(土)、烏山線開業90周年記念式典をJR烏山駅で開き、市内外から約2500人が訪れ、駅前広場は人であふれ返りました。

左／式典に集まった人々と屋台。
右／JR烏山線90周年記念パレード。
下／烏山線キハ40系3色の特別編成車両。



左／式典に集まった人々と屋台。
右／JR烏山線90周年記念パレード。
下／烏山線キハ40系3色の特別編成車両。



式典には、5町の屋台が勢ぞろいした他、市のイメージキャラクターが参加しました。引き続き、5町の屋台が記念パレードを行い、駅前から御仮殿前までの沿道は、たくさんの観衆で埋め尽くされました。

また、1日限定で現在使用されているキハ40系全3色を連結した特別編成車両を計3往復運行し、駅や沿線の景勝地では、鉄道マニアがカメラを構えるなどにぎわいを見せました。



大谷市長に切手を贈呈。

日本郵便(株)では、地域限定フレーム切手「山あげ祭vol.2」を7月1日(月)から県東部地域で発売しました。発売日には、栃木東部地区連絡会統括局長の薄井一博東那須野郵便局長等が市役所を訪れ、大谷範雄市長等に切手を贈呈しました。80円切手10枚からなるシートは、1部1200円で、昨年の100部から2000部に販売枚数を増やすなどし、山あげ会館や郵便局等で販売されています。

特設ステージでイベント盛ん

山あげ祭の期間中、山あげ会館前広場の特設ステージでは、民族芸能やダンス、民謡ショーの他、どちまるくんとシヨーの他、からずまる、やまと

んによる、どちまる体操など様々なイベントが行われました。同時に、「ふるさと物産展」が開かれ、鮎の塩焼きや鉄道グッズ、その他、地元の名産品



上／どちまる体操を踊るキャラクターたち。下／アイスクリームの歌とダンス。

地域限定フレーム切手 山あげ祭vol.2

やお土産が並び、子どもから大人まで楽しんでいました。

学校再編

児童・生徒数の減少に伴い
学校再編の答申が報告され

那須烏山市では、少子化に伴い小・中学校の児童・生徒数が減少を続け、平成24年度には市内の小学校2校中学校1校で各学年1学級(單學級)という状況にあります。その結果、クラス替えが行われずに児童・生徒の一
間関係が固定化し、また、集団学習や部活動などに支障をきたすなど、教育環境への影響も懸念されています。
このため、教育委員会では、学校再編検討委員会を設置し、学校再編整備のあり方を検討してきました。その
答申がまとまり、このほど教育委員会から市長に報告されましたので、その概要をお知らせします。

答申書の概要

1、基本的な考え方

④地域コミュニティとの一体感が生まれやすい。

① 小学校においては、クラス替えが
しい。

準学級数を有する学校は2校、下回る学校は3校あるが、以下のことか

市教育委員会では少子化に伴う児童・生徒の減少や、学校施設の耐震化に係る諸問題等の解決を図るために、昨年6月に「那須烏山市立学校再編検討委員会(松本武委員長)」に市立小

中学校の適正規模・適正配置の基本的な考え方と再編整備の具体的方策について諮問しました。

同検討委員会は、学長様やHTA保護者、関係行政区長のほか、議会議員や学識経験者など14人をメンバーに、9回にわたり慎重に検討を重ねてきました。その結果、今年3月、答申書(下欄参照)に取りまとめて市教育委員会に答申し、5月には市長あてにその結果が報告されました。

那須烏山市における

市では、旧烏山町の「烏山町立学校問題懇談会」の答申に基づき、平成18年から24年にかけて烏山地区の再編

学校再編の歴史

①教員の目が学校全体や個々の児童生徒に行き届きやすい。
②児童生徒と教職員、児童生徒同士の人間関係が深まりやすい。
③学校の施設や設備等でゆとりある学習環境が得られる。

(3) 小中学校の規模・適正配置の考え方
今後の学校の活性化と教育効果を高めるため、以下の規模・配置が望ま

(1) 小学校

2、学校再編の 具体的対策について

具体的対策について

本市の中学校のうち、国が示す標準学級数を有する中学校は1校であり、以下の「」から「下江川中学校」、「荒川中学校」を統合し、一定の学校規模を確保することが望ましい。
①両校は、標準学級数を満たしていない。

機関を確立するに前掛にして、本市の地域性等を踏まえて、近隣

④一定の地域を形成するそれぞれの区域に5つの学校が位置している。



整備が進められてきました。平成18年4月には、境中学校と烏山中学校が統合し、「新・烏山中学校」が開校しました。平成21年4月には、境小学校と東小学校が統合し、「新・境小学校」になりました。さらに、24年4月には、七合中学校と烏山中学校が統合して、「烏山中学校」となりました。この結果、合併時に7小学校、5中学校あった市立学校は、「5小学校・3中学校」となりました。

今回の答申は、さらに児童・生徒数の減少が進む中で、児童・生徒のより良い教育環境のあり方を検討した結果、まとめられたものです。

地域住民に向けて 説明会開催

7月8日㈪には下江川地区、7月10日㈬には荒川地区で説明会を開催し、2日間で約170人の地域住民が参加しました。当日は、まず、教育委員会事務局が答申を説明。参加者からは、統合の時期や統合した場合の登下校時のこと、子どもたちの精神面のケアなど、様々な質問がされました。

市では、今後も説明会を開催し、意見を伺いながら、児童・生徒を第一に考えて方針を決定していくことにしています。



下江川地区の説明会



荒川地区の説明会。

整備が進められてきました。平成18年4月には、境中学校と烏山中学校が統合し、新「烏山中学校」が開校しました。平成21年4月には、境小学校と東小学校が統合し、新「境小学校」に、また、七合小学校と興野小学校が統合して、新「七合小学校」が開校しました。さらに、24年4月には、七合中学校と烏山中学校が統合して、新「烏山中学校」となりました。この結果、合併時に7小学校、5中学校あつた市立学校は、「5小学校・3中学校」となりました。

今回の答申は、さらに児童・生徒数の減少が進む中で、児童・生徒のより良い教育環境のあり方を検討した結果、まとめられたものです。

②両校の学区では、将来推計から、今後、単独で標準学級数を満たすような生徒数の増加は見込まれない。

③両校は、地理的接続も比較的良好く、将来推計でも統合により一定規模の9学級以上を確保できる。

(3) 中学校統合の時期

緊急の課題であり、できるだけ早い時期(3年以内)が望ましい。

(4) 中学校施設の活用と整備

既存の学校施設を利用するこことし、統合後の学校規模から1学年4学級の普通教室を確保できる荒川中学校の校舎を活用する。また、統合後は、下江川中学校校舎の施設設備を整備し、江川小学校校舎として有効に活用することが望ましい。

既存の学校施設を利用することとし、統合後の学校規模から1学年4学級の普通教室を確保できる荒川中学校の校舎を活用する。また、統合後は、下江川中学校校舎の施設・設備を整備し、江川小学校校舎として有効に活用することが望ましい。

3、中学校統合をする場合の課題と対応

3、中学校統合をする場合の課題と対応

路、学校施設の状況、学校の果たす地域での役割などを総合的に検討、配慮する必要がある。

(1) 学区の広がりへの配慮

① 通学時間をできる限り短くすることが重要であり、登下校時の路線バスの利用やスクールバスの導入等交通手段の支援が必要である。また、学校活動等にも制約が生じないよう、スクールバスの導入には時間的工夫や対策が必要である。

② 通学路の道路整備や道幅に付帯する安全施設の整備が必要である。

③ 統合により保護者に新たな経済的負担が発生する場合は、負担軽減の措置などが必要である。

(2) 生徒の学習環境への配慮

① 統合予定学校の生徒同士又は生徒と教職員、PTA同士による相互交流を図るなどの配慮が必要である。

② 教職員配置や生徒同士並びに生徒と教職員の良好な人間関係構築に、最大限の配慮が必要である。

(3) 魅力ある学校の創造

① 統合前の学校における教育方針、特色ある教育、学校運営上の工夫などを生かしながら、新校の実態や地域の実情を踏まえ新たな校風や魅力ある学校を創り上げるためのたゆまぬ努力が必要である。

② 学級数や生徒数の増加に対応した学校施設・設備の充実が必要である。

(4) 地域「ミニユーティ」への対応

① 地域社会において学校が果たしてきた役割を考慮し、活力ある良好な「ミニユーティづくりができるよう努める必要がある。

② 施設の状況や地域住民の意向など、を踏まえた学校跡地の有効活用に努める必要がある。

4、中学校統合を実施するにあた

4、中学校 実施す

統合力を
るためにあたつて

と。

(1) 実施にあたって配慮すべき事項

① 共に新しい学校を創っていくといふ前向きな気持ちが持てるよう配慮すること。

② 本市では、地域の支援のもと特色ある学校づくりが進められてきた。学校統合に際して、地域性に十分配慮し、保護者や地域住民の理解を得ながら実現を目指すよう配慮すること。

住民の理解と協力のもとに円滑かつ計画的に進める必要がある。

那珂川沿川自治会で水防訓練

那珂川沿川の3自治会で、7月14日(日)、那珂川クリーン作戦の開催に合わせ、水防訓練が実施されました。

7月に自主防災組織を結成した宮原自治会(栗田寛会長)では、初めての水防訓練をレインボーハウスで行い、地域住民や地元消防団員など約50人が参加しました。

土のうの積み方を学ぶ参加者(宮原)。

7月に自主防災組織を結成した宮原自治会(栗田寛会長)では、初めての水防訓練をレインボーハウスで行い、地域住民や地元消防団員など約50人が参加しました。

栗田会長は、「初めての訓練で、貴重な経験ができた。行政ばかりではなく、自分たちで地域を守るために、今後も訓練等を継続していきたい」と話していました。

なお、城東自治会、興野自治会でも同様の訓練を実施し、有事に備えました。

うの積み方を学んだ後には、この日作ったものを実際の水害に備え、児童館に保管しました。市総務課危機管理室職員による講習会では、危険箇所や避難所などを掲載したハザードマップの活用法などが説明されました。



カヌーを楽しむ参加者。

荒川でカヌー体験

B & G 南那須海洋クラブ(黒須清会長)では7月15日(日)、海洋性スポーツ普及大会を荒川河川敷で開き、市内の親子連れなど25人が参加しました。

大会は、海洋性レクリエーションの普及と環境意識を高めるため、毎年「海の日」に開催。当日は、ライフジャケットを着用した参加者が、交替でカヌーを体験し、その後は、河川敷のゴミ拾いを行いました。

市消防団夏季点検

万全の備えを確認

一斉放水点検。



市消防団(興野一美団長)の夏季点検が7月7日(日)、大桶運動公園で開かれ、正副団長のほか8分団4部から454人、女性消防団2部から20人、3中学校の少年消防隊73人が出場しました。

点検は、これから台風シーズンなどに備え、機械器具や操作方法等を点検し、いざというときに対処できるよう毎年この時期に開いているものです。参加した団員は、服装点検や機械器具点検、放水点検、分列行進などを一糸乱れぬ動作で済ませ、万全の備えを印象付けました。

なお、点検前には、新人団員等の礼式訓練に合わせて、団員OBによる「支援団員」を対象とした消防ポンプ車両等の操作訓練を初めて行いました。



キビキビした行動を見せる団員。

地域雇用創造協議会

事務所がオープン

国の事業採択を受け、本市の産業と雇用創出のために取り組む地域雇用創造協議会が、上境の那須南森林組合烏山支所内に事務所をオープンしました。7月19日(金)には、事務所の



事務所看板を手にする大谷市長(左)と栢木労働局蛇走喜彦部長。

開設式を開催し、那須烏山商工会、那

須南農業協同組合、那須南森林組合の代表等、同協議会メンバーのほか、

栢木労働局職員や市議会議員等34人

が参加しました。大谷範雄市長は、

「市内の雇用状況はまだまだ良くな

いが、この事業を生かし、地域の活性化と雇用の確保を進められるよう期

待したい」と話していました。

同協議会では、事業推進員2名も決まり、約3年間にわたり事業を開いています。今後は、雇用拡大につながるセミナーや人材育成セミナー、新商品開発事業を進めていくことにしておきます。

和光市民と交流 本市の自然と文化にふれあう

本市と防災協定を結ぶ埼玉県和光市の親子10組35人が、7月27日(土)・28日(日)の2日間、「夏休み里山体験教室」で、本市の農家にホームステイし、里山体験を満喫しました。

初日に南那須丘舍に集合した参加

者は、ホームステイの受け家族と対面。山あげ祭見学や農業体験を通し、

本市の文化や、自然に触れ、受け家族との交流を深めました。和光市の大久保昭男教育長も駆け付け、参加者を激励しました。

また、7月27日(土)には、「現地歴史講座」が初めて開かれ、和光市民35人が、本市を訪れました。参加者は、山

あげ祭や龍門の滝、島崎酒造どうくつ酒蔵等を見学し、歴史ある文化を堪能。「那須烏山市がこんなに素敵なところだと知らなかつた。また個人的に来たい」と話していました。



里山体験 & 歴史講座

右:里山体験で和光市の親子と受入家族が対面／下:現地歴史講座で龍門の滝を見学。

